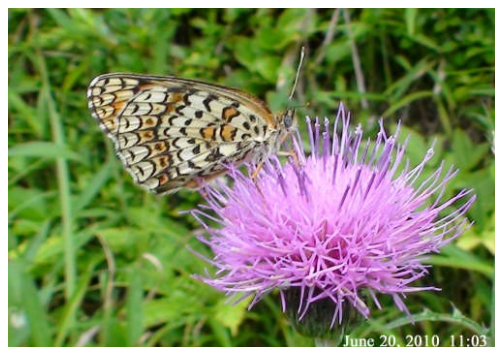


私の手持ち標本箱の中に、ヒョウモンモドキの展翅個体 1 ペアがきれいな形で残っている。通常、標本とラベルの記載事項を見れば、採集時のリアルな思い出が直ちによみがえるものだが、残念ながら私自身が採集したのではないので、思い出されるのは、蝶友の K さん宅を訪問した際に気前よく「これも持って行っていいよ」と選別してくれたあの K さんの笑顔くらいだ。図示したようにその標本ラベルには産地：広島県世羅町、飼育羽化日：May 30, 1982、及び飼育をされた K さんの名前が記載されている。1982 年頃は長野・山梨・岡山県などでもこのチョウをまだ見ることができた時代で、絶滅の危機に瀕することなど考えられなかったはずだ。



私が昆虫少年時代をすごした高知市でヒョウモン類として見られたのは、ツマグロヒョウモン、ミドリヒョウモン、稀にメスグロヒョウモンくらい。当時、オオムラサキにも出会える昆虫の宝庫であった梶が森という山地へと足をのぼして初めてクモガタヒョウモンとかウラギンヒョウモンに出会えたわけで、オオムラサキやキベリタテハなどに魅入られていた頃、ヒョウモン類にはあまり興味はなく、ましてやこのヒョウモンモドキはおせじにもきれいだとは思っていなく、現安曇野市の M さんと郵便によるチョウ標本交換をしたとき、松原湖産ヒョウモンモドキを提供できるという申し出に少しも興味を抱かなかったものだ。

そんな私が 2010 年 3 月、加古川の里山・ギフチョウ・ネットの総会で、広島のヒョウモンモドキ保護活動の実態を見学したい、と提案することとなるから時代の変化、人の心境変化は分からない。これには賛同者が多く、2010 年 6 月 20 日「チョウが飛んでくれるかどうかは怪しい」との現地担当者の事前情報に不安を感じながら訪れた広島県世羅町の某所は、まさにせまい休耕田。食草であるキセルアザミが生い茂る雑草群に覆われて、ヒョウモンモドキの産卵を阻むこととなるためその環境保全活動が大変だという。この日は幸いにもヒョウモンモドキが数頭飛び始め、ノアザミ花上でゆっくり吸蜜する個体を、参加者全員で交代しながら撮影を



楽しむことができたが、日本全体でこのチョウがみられるのは広島の限られたわずか 3 か所だけになっておりまさに絶滅寸前

だという。草原性チョウがどんどん減っていく状況をどうにかしなくてはならないと痛感した見学会であった。